2023年3月19日　中野教会日曜礼拝

　　　　　　　　**「小さな（大きな）希望にしがみつく信仰」**

聖書箇所：哀歌2:9-12、4:20-22

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　ユダヤ教の暦の5月9日、太陽暦では7月に、ティシャ・ベアブという日があります。ヘブル語で5月9日の意味です。この日にユダ王国が新バビロニアによって滅ぼされました。エルサレム神殿崩壊の日です。BC586年の出来事です。そしてユダ王国の枢要な人々はバビロンに捕囚の身となったのです。いわば、敗戦記念日です。この日は国を失った民イスラエルが、その運命を嘆き悲しむ断食の日です。2500年以上の間、世界中のユダヤ人によって守られ、現在も続いています。この礼拝の時読まれるのがこの哀歌です。嘆きの壁、というのが今もあります。これはソロモン神殿の一部がエルサレムの度重なる破壊にも耐えて残った部分と言われており、この日にはこの壁の前で礼拝が持たれます。

　哀歌は全体で5章あり、一言で、1章は「哀歌」、2章は「絶望」、3章は「希望」、4章は再び「絶望」、5章は「期待」と名付けられています。1章は「哀歌」と名付けられています。1:2をお読みします。「夜もすがら泣き、頬に涙が流れる。彼女（イスラエル）を愛した人のだれも、今は慰めを与えない。友は皆、彼女を欺き、ことごとく敵となった」とあります。では2章を見てみます。「絶望」の章です。2:11-12をお読みします。「わたし（詩人）の目は涙にかすみ、胸は裂ける。わたしの民の娘が打ち砕かれたので／わたしのはらわたは溶けて地に流れる。幼子も乳飲み子も町の広場で衰えてゆく。/幼子は母に言う／パンはどこ、ぶどう酒はどこ、と。都の広場で傷つき、衰えて／母のふところに抱かれ、息絶えてゆく」とあります。

　3章は「希望」の章です。3:1「わたしは／主の怒りの杖に打たれて苦しみを知った者」という言葉で始まりますが3:18「わたし（詩人）は言う／「わたしの生きる力は絶えた／ただ主を待ち望もう」とあります。いわば、絶望の中での希望の境地です。この章は「希望」と言われていますが、その希望は「絶望」の中でのかすかな「希望」なのです。そのかすかな希望さえ。次の4章で裏切られます。4:3-4を読みます。「山犬ですら乳を与えて子を養うというのに／わが民の娘は残酷になり／荒れ野の駝鳥のようにふるまう。/乳飲み子の舌は渇いて上顎に付き／幼子はパンを求めるが、分け与える者もいない。」とあります。4:10には「憐れみ深い女の手が自分の子供を煮炊きした。わたしの民の娘が打ち砕かれた日／それを自分の食糧としたのだ」とあり、母と子供の残虐劇が行きつくところまでに行ってしまいました。しかし、再び、かすかな希望が見えてきます。4:20です。「主の油注がれた者、わたしたちの命の息吹／その人が彼らの罠に捕えられた。異国民の中にあるときも、その人の陰で／生き抜こうと頼みにした、その人が。」とあります。しかし、希望の人も捕らえられてしまうのです。

　5章は最後の章であり、「期待」の章と言われています。ところが5:11「人妻はシオンで犯され／おとめはユダの町々で犯されている」と言われ、5:13「若者は挽き臼を負わされ／子供は薪を負わされてよろめく」と言われ、5:20では、「なぜ、いつまでもわたしたちを忘れ／果てしなく見捨てておかれるのですか」と主なる神に抗議しています。しかし5:21「主よ、御もとに立ち帰らせてください／わたしたちは立ち帰ります。わたしたちの日々を新しくして／昔のようにしてください」と叫び、主なる神への希望を叫びます。この「立ち帰る」は新約でいう「悔い改め」です。ところが最後5::22「あなた（主なる神）は、激しく憤り／わたしたちをまったく見捨てられました」という言葉で終わってしまうのです。「期待」の章とはとても思えません。

　イスラエルの民に臨んだ神の怒りは、容赦なく下され、かすかな希望があるように見えてもそれは一時的幻想であり、再び絶望の中におかれるのです。イスラエルの民は、これ以上、落ちるところはない、くらいにまで貶められて、あとは神の赦しが来るのを待つだけだ、というのです。それは、希望というより、一種の開き直りのようにさえ感じます。それも絶望に終わるのです。このようにみてくると、哀歌はすさまじい詩です。大国のはざまで生き抜いてきたイスラエルの民は、どうにも逃げられない苦難の淵にありました。本当に絶望です。その中でもかすかな希望の光を見出そうとしてきました。しかし、常に裏切られます。それでも希望の光を見ようとして他の地に向かうのです。ユダヤ人の歴史をみると、この哀歌を地で行っているような出来事が見えてきます。

　ユダヤ人迫害史を見始めたらきりはありませんが、私たちクリスチャンはユダヤ人迫害の下手人であったという歴史的事実です。この迫害はキリスト教の名で行われたのであって、あれは「悪いクリスチャンがやったのだ」と片付けられる話ではありません。少なくとも、知っていて知らぬふりをしてきたのです。キリスト教の教えのなかに、差別をあおるようなところはないのか、という問題もあります。「ユダヤ人はキリスト殺し」と言ってユダヤ人を差別してきたのは事実です。

このユダヤ人迫害史の各場面のなかで19c末にロシア帝政時代のウクライナで起きたポグロム（民衆のユダヤ人殺しの暴動）とユダヤ人追放の出来事をテーマにしたのがミュージカルで有名な「屋根の上のヴァイオリン弾き」です。ウクライナの小さな村の牛乳屋のユダヤ人一家の話です。夫婦と5人の娘です。ユダヤ人の律法をちゃんと守りつつましく生活していました。夫婦はユダヤ人として娘に婿として来る若い男を探していました。しかし、上の三人の娘は、親の気持ちにもかかわらず、仕立屋の男、革命を夢見る学生闘士、ロシア人の青年、へと次々と親元を離れていきます。そのうち、ポグロムのうわさが聞こえてきて、この村も落ち着かない状態になります。ついに、ユダヤ人追放命令が出ます。夫婦と残りの二人の娘は別の地に逃げざるをえません。そこの場でユダヤ人・ラビは「新しい地で神の祝福を」と祈ります。村を立ち去る、一家を送るのが屋根の上でヴァイオリンを奏でる一人の男でした。悲しい音楽です。いつも、今度はということで希望を持ちますが、また新しい地で失望し、追放され、更に彷徨う、というユダヤ人の中世以降の運命を表現しています。

絶望の下で、あえて、あえて希望を持つけれども、結局また絶望に落とされる結末です。原作ではイスラエルの地に向かうことになっていますがミュージカルではニューヨークに向かうことになっています。当時、アメリカはどこにもいられない人間が最後に行く地であったのです。この一家は、アメリカの地にかすかな希望を見て、この希望にしがみつくようにして未知の土地に向かっていったのです。「小さな希望にしがみつく信仰」と言えると思います。しかし、その小さな希望は、天地を創造された全能の主なる神に掛ける希望であり、大きな希望でもあるのです。

実に、ユダヤ人迫害史は哀歌を地で行く歴史でした。このような歴史を繰り返していくと通常は、民族は消えてなくなります。しかし、彼らは消えませんでした。今も強力な集団を保っています。全世界で1,340万人のユダヤ人がいます。ユダヤ教という宗教がこれを維持しています。ユダヤ教は当初のイスラエル信仰から大きく変容し、宗教による民族形成という特殊な集団を作りました。そして、パレスチナの地に独自な国家を形成するにまで、に至ります。私は今のイスラエルという国がやっていることを正しいと言っている訳ではありません。むしろ、大いなる罪に陥っている、と思います。ユダヤ人は、極めて問題の多い宗教集団ですが、しかし。主なる神の選びの民の一部であることに変わりはありません。毎年、繰り返されるユダヤ暦5月9日の哀歌朗読はその苦難の歴史を振り返る機会です。新しきイスラエルを自称する我々キリスト者も本来のイスラエル信仰、主イエスの言動に従おうとするとこの哀歌に示された苦難に直面するのかもしれません。

イスラエルの国歌はお渡しの資料に入れておきました。「2000年の希望とは自由の民として生きることシオン、エルサレムの地において」と言っています。この歌詞は1878年にルーマニア北東部の都市ヤシにて、詩人インベルによって作られました。このエルサレムとはエルサレムの町を指している、と解釈する必要はありません。我々、キリスト者は「神の国」のことだと理解すべきです。この歌詞は、主の祈りで我々が日々祈っている「御国を来たらせたまえ」の願いと同じです。ユダヤ人は2000年来、この「希望」に支えられ生き延びてきたのです。

ユダヤ人迫害と言えばだれでも思い出すのはナチスによるホロコーストでしょう。アウシュヴィッツの収容所でのガス室による大量殺戮は有名です。ある時、ユダヤ人の女性たちがシャワーを浴びるためと称して、全員裸になり、列をなして、讃美歌を歌いながら、讃美歌を歌いながらガス室に入って行った、という話があります。歴史的事実ではない、とされていますが、これはユダヤ人の希望というものが何なのだ、ということを示している「真実」の物語です。主なる神、主なる神にのみ「希望」をみて賛美しつつ歩む神の民の姿がここにあります。彼女たちはそこに入って行ったら、死が待っていることくらい、とっくに承知していました。今の私たちにはその讃美歌は悲しいヴァイオリンのメロディと同じです。死後に続く、主なる神の力を信じて、賛美をしているのです。大いなる全能の神に希望を託しているのです。

主イエスの山上の説教の中に「悲しむ人は幸いである。その人たちは慰められる」とあります。ユダヤ人の多くの人々は流浪の歴史の中で「悲しみ」を背負って生きてきました。どれだけの涙が流されたでしょうか。主イエスはそのような悲しみにある人は「幸いである」とおっしゃっています。「幸いである」とは祝福される、という意味です。幸福な時が音連れる、と約束されています。そして主が慰めてくださる、とおっしゃっています。この「慰められる」とは単なるセンチメンタルな言葉ではありません。主がともにこの悲しみを担ってくださる、ということです。インマヌエル、神ともにあり、という信仰告白なのです。私たちキリスト者は新しいイスラエルとしてこのイスラエル民、ユダヤの民の伝統の継承者であります。主イエスのこの言葉にかすかな、小さな、でも大いなる希望にしがみついて生きる民なのです。主イエスはこの悲しみの下にある人々にこそ働かれるのです。あえて言います。悠々としている人は主イエスの関心の外なのです。「適当にやれ」とおっしゃっているのかもしれません。恵みは「悲しむ人」にこそ注がれるのです。キリスト教というのはそういう宗教なのです。自分の力でやれる人は、キリスト教は関心の外なのです。

私たち、皆さん、なんらかの「悲しみ」を持っているでしょう。イスラエルの民や、ユダヤの民に比べれば比較にならない小さな悲しみだと思うかもしれません。この中野教会もこの「悲しみ」を経験しました。キリスト教の歴史の中での「悲しみ」の歴史から見たらほんの点に過ぎないことでしょう。しかし、主イエスは自分の体なる教会が「悲しみ」を経験されたことをご存じです。先月の教会総会の巻頭言は「希望の家」でした。この言葉を、アブラハム以降の4500年の「悲しみ」の歴史の中においてみて見ましょう。主イエスの言葉に中で見てみましょう。悔い改めて、かすかな希望にしがみついていく信仰こそ、我らの信仰です。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、この礼拝と賛美の時を感謝いたします。今日は哀歌をユダヤ人の歴史の中において考えてみました。小さな希望、しかしそれは主なる神への希望ですから大いなる希望です。この希望に私たちはしがみついて生きていきます。絶望に見える時に希望をみることができますよう、私たちに強い信仰をお与えください。私たちの教会は長年の会員が去っていくという悲しみを経験しています。これは勝ったか負けたかの問題ではありません。主イエスを共にする兄弟姉妹が別れを経験しているのです。この絶望と見える中にかすかな希望を見ることができますように、私たちに一筋の光を下さい。主イエスの御名により祈ります。アーメン）